The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	FL環境の日本人英語学習成功者の学習体験トラジェクトリ : 自己調整学習の観点から
Author(s)	吉田, ひと美
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26222
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕FL環境の日本人英語学習成功者の学習経験トラジェクトリ
－自己調整学習の観点から－

学位申請者　　吉田ひと美　　印

本研究は、外国語の学習は目標言語が話される地域に行くことが最良の学習方法であると考える多くの日本人英語学習者の信念に疑問を呈することに端を発している。日本で英語の学習を続け、学習に成功している学習者は存在し、このような言語学習成功者（Good Language Learners、以下GLLs）を対象とする研究はこれまでもされてきた。しかし、本研究は、先行研究におけるGLLsの捉え方と研究方法に関して次のような問題点を挙げる。

まず、GLLsの捉え方に関して、これまでのGLLs研究では、その対象として留学経験がある者や、幼少期に海外滞在経験がある者を含めてきた。このことは、外国語環境（Foreign Language setting、以下FL環境）で英語学習を続ける多くの日本人英語学習者に、英語習得のためには英語が話されている地域に行くことが最良の学習方法であり、それは必須であるという信念を固定化させてしまうという逆効果を生んでしまったのではないだろうか。また、留学を希望する全ての学習者が留学の機会を得られる訳ではないという現状を踏まえると、FL環境にいながら手に入れられる学習環境をうまく活用することで英語学習に成功する方法を明らかにしようとする本研究の成果が学習者に還元できるものは多い。さらに、先行研究では、GLLsが使用する素晴らしい学習方略を提示したり、彼らを常に高い動機を維持するサイボーグのように捉えられてきた。しかしながら、彼らの他の学習者同様、学習の途中で躓き、スランプに陥ったり、恥ずかしい思いや悔しい思いを経験している。本研究は、GLLsがスランプに陥っても学習を継続していく、つまりスランプ後の学習への取り組み方に目を向けることが彼らの学習を支える重要な部分であると捉えている。

次に、研究方法に関して、GLLsの学習方法・行動に関する本格的な研究、研究枠組み、研究手法は70年代以降多くの研究者によって発達を遂げている（Naiman et al. 1987; Rubin 1975など）。しかし、その多くは彼らが学習遅滞者と比較してどのような学習方略を使用しているのかといった学習方略に特化したものが殆どであった。90年代以降、量的研究がすすんだが、Cohen (1998) は方略の効果について使用の頻度や学習の段階、使用状況やプロセスを組み込んだ解釈の必要性を主張している。さらに、学習をとりまく関連領域や学習の文脈、学習者に個別性を差し置いてきたこれまでの研究において、学習者の学習の結果は産物（プロダクト）と捉えられ、産物を作り上げる要因やその構成要素の抽出が試みられてきたが、どのような学習プロセスや行動調整を経てその産物が出現しているかは、産物指向的な従来の研究や実践では必ずしも明らかにされてこなかった。

以上の先行研究の問題点を踏まえ、本研究ではGLLsを英語圏への滞在経験なくFL環境での学習により英語の学習に成功している学習者（英検１級又はTOEIC950点以上かつCEFR自己評価C1以上）を対象としている。学習者が接する学習環境の違いや、環境への適応能力、年齢、性格などの要因により、学校生活も個人的な学習活動の実践も全く異なる経験となるため（Block 2007; Kormos & Csizer 2008; Norton 2000）、学習成功者という類型化した学習者集団としてとらえるのではなく、学習者一人一人の学習トラジェクトリを丹念に見ていくことが必要であると考えた。そして、学習者の行動調整に対して影響を与えている様々な要因（学習方略、学習動機、学習者要因、過去の経験、情動、社会的文脈など）が相補的で不可欠な役割を担っていることに着目した。さらに、学習はある一定の時期に急激に達成されるものではないため、発達の視点と並行し英語学習に成功した学習者がどのように英語に触れ始め、どのような学習経験を経て、どのような英語学習への信念を形成し、どのように自己調整学習をすすめ、現在にいたるのかライフ・ストーリーの手法を用いることで通時的に検証した。

４名の英語学習成功者の学習体験トラジェクトリに基づき、自己調整学習の３つの構成要素「自己調整学習方略」「自己効力感」「目標への関与」（Zimmerman 1989）を切り口として自己調整学習の特徴を分析した。本研究の分析で

明らかになったことを次のようにまとめる。

まず、自己調整学習方略の観点から見たとき、学習の進め方、学習リソース、学習実践の場は４人それぞれに異なり、それぞれに個人の学習の文脈で学習が行われていた。また身近な環境のなかでアクセス可能なリソースはテクノロジーの発達によってさまざまな形態で選択肢として遍在しており、彼らはそうした多くの選択肢の中から自分にあった最適な学習を整備していることがわかった。彼らが共通して利用する学習リソースは映画であったが、映画を活用する学習の中にも、学習活動を個性化するゆりや、友人の映画学習に学んでその効果を独学の中で発見していくケン、映画を観る機会が容易に得られず映画館でのアルバイトをすることで映画鑑賞の機会を作るさつきなど、映画を活用した英語学習にもそれぞれに異なる取り組みが観察された。また、それぞれが自分にあった取り組み方をすることで、学習が無理なく持続可能な形態で行われていた。共通する自己調整学習方略の使用傾向の１つに、高校卒業以降に高まっていることが明らかになった。これは、高校卒業後、家庭環境や周囲の大人からの干渉が減少し、学習環境や学習機会、人との出会い、時間の使い方、行動範囲に対して他者からの規制が緩和されたことで、彼らはより自己調整的な学習を行うことを示している。このことから、FL環境であっても、学習者の自己調整によって、英語学習のためにできることは広げることが可能であると言えるだろう。また、自分の学習環境で目標を達成させるために、学習環境で与えられる機会を活用するだけでなく、制約条件のもとでどのような可能性があるのかを模索していることについて取りあげた。また、考察では、動機づけ・学習の継続・学習環境整備という側面に注目し、学習行動の様々な局面においてメタ認知的判断が学習調整に大きく関わっていることがわかった。

次に、自己効力感について、先行研究は自己調整学習方略の使用との相関性を示してきたが、本研究では学習の全ての段階おいて必ずしも関連性があるわけではないことがわかった。例えば、Zimmerman and Martinez-Pons (1990) では、学業が優秀な群の方が自己効力自己調整学習方略の使用のレベルが高く、自己効力感が自己調整学習方略の使用と関連していることを示している。しかしながら、これらの研究は、学習中期以降すなわち学習成果が顕著に現れている時期にのみ注目している。本研究では、学習初期から学習後期の自己効力感の変化に光を当てることで、自己効力感と自己調整学習方略の使用が必ずしも関連しているわけではなく、学習初期の自己効力感は、周囲の人たちの褒めや励ましによって高く、中期から後期にかけては、困難や失敗に遭遇することで度々低下していることが観察された。そして、低下した場合、低迷することなく、高まっていることが重要であり、この現象について解明するために、考察では「期待と不安」や「ペルソナ」という心理学の概念を使って説明した。また、トラジェクトリと自己効力感の変化を照らし合わせて読み進めていくことで、自己効力感には学習者自身の英語能力に対する自己評価と他己評価をどのように「認識」するかが大きく関与しているということがわかった。

目標への関与については、４人の学習成功者のトラジェクトリにおいて、英語との接触が途絶える時期がないことに注目し、学習の各期における彼らの学習目標の性質について検討した。それを踏まえた上で、目標設定から達成のための取り組みについて考察をすすめた。彼らは個人の性格や興味、学習スタイルなどにあった学習活動に参加し、目標達成のための具体的な取り組み方はそれぞれに異なっていた。そして、４人それぞれが、学習の継続によって目標を達成させるその過程を、「目標の個性化」「実践共同体への参加」「グループフロー経験」「ユビキタス学習」という概念を使って説明を試みた。

本研究の４人の学習成功者が学習のために使用した活動は、必ずしも、他の学習者にとって最適な学習活動であるとはいうわけではない。そのため、他の学習者にとって、彼らの学習実践を同じように試みても、同じ結果を得ることができるとは限らない。しかし、本研究は、他の学習者が個人の興味や関心、学習のスタイルなどに合致した学習活動を実践しようとするとき、あるいは、どのように学習活動をすすめていけばよいか悩むとき、学習成功者のトラジェクトリを参考にすることができると考える。そのため、本研究はトラジェクトリの記述において、成功要因となる方略使用や学習活動を起こすためのさまざまな学習経験の蓄積、意識の変化、そこに結びつくさまざまな要因、つまり「なぜ」そのような行動をとることになったのかを具体的に描写するように細心の注意を払った。本研究におけるライフストーリー研究の読者は、語り手である学習成功者の個別の事例との対話から、自らの学習を振り返り、自分の身の回りの学習環境から英語を上達させる可能性を見いだし、トラジェクトリから取り入れられるものを取り入れながら、その後の実践につなげていくことが期待できると考えている。

最後に、学習成功者の自己調整学習の全体像を描くことで、学習成功者ははじめから独立して学習を進めていくのではなく、学習の文脈で出会う活動、教材、人、環境などの外的要因によって大きく影響を受けることを明らかにした点は、教育者が今後、どのように他の学習者と関わることで、彼らを自己調整的な学習者と導いていくことができるか、という教育的示唆を含んでいるだろう。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　吉田ひと美　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
主 査	教授	西口光一
副 査	教授	沖田知子
副 査	准教授	スミス村上アンドリュー

論文審査の結果の要旨

第二言語の習得を成功に導くという関心の下に第二言語教育研究において、動機づけや学習方略などの観点からさまざまな言語学習成功者の研究が行われてきた。そして、これまでの研究では言語学習成功者は高い動機づけを有していること、そして優れた学習方略を駆使していることなどが明らかにされてきた。また、留学経験や幼少期の海外滞在経験なども言語学習成功の重要な要因として提示されてきた。一方で、大部分の日本人英語学習者は日本で日本語という外国語環境にいながら英語学習に従事しており、その中には際だった成功を収めている者もいる。そのような文脈で、本論文は日本という外国語環境での英語学習成功者に注目し、かれらの学習の経路を綿密に辿ることによりかれらを外国語習得の成功に導いた要因を明らかにしようとするこれまでにない研究である。

本論文では、動機づけの研究から発展した自己調整学習理論と人類学における徒弟制研究における状況論的アプローチを枠組として研究を進めている。本論文では、まずはじめに、留学や海外滞在経験などをすることなく高度な英語の習得に成功した４人の日本人英語学習成功者（いずれもＣＥＦＲでＣ１あるいはＣ２レベル）を選び、かれらを対象としてライフストーリー・インタビューの手法を使って学習経験トラジェクトリーを詳細に描くことに成功している。その過程で、過去の経験を想起してもらうためにマインドマップを活用するなどの工夫をしていることも適切である。そして、４人の学習経験トラジェクトリーのそれぞれを自己調整学習方略、自己効力感、目標への関与という３つの共通の観点で分析していることも、分析の手法として巧みである。また、学習経験トラジェクトリーや自己調整する力の発達や自己効力感を図式的に示していることも分析の方略として優れている。さらに第８章では、同様の３つの観点で４人の分析結果を横断的に見ることで、かれらを成功に導いた要因を一定程度抽象化し一般化することに成功している。より具体的には、自己調整学習方略については、動機を高める仕掛け、学習を継続する仕掛け、学習を整備する仕掛けというふうに英語習得成功の要因を一つのシステムとして捉えていること、自己効力感についてはユングのペルソナの概念をそして目標への関与ではグループフローの見方をそれぞれ援用して有効に考察していることなど、外国語学習環境で英語学習を成功に導いている重要な要因を捕捉することに成功している。

このように本論文はしっかりとした研究枠組の下に、適切な手法によりデータの収集が行われ、巧みにデータを分析し、有効な視点から考察を行った優れた研究となっており、言語学習成功者の研究に重要な貢献をなし得るものである。また、実践的にも成功者から学ぶための資料を提供し得るものとなっている。研究の枠組となっている２つの理論を融合する視点がやや弱いこと、教育への応用に向けた考察が必ずしも十分ではないことなどいくつかの課題はあるが、それらは本論文の価値を損なうものではない。

以上のような理由で、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。